

日本消化器外科学会雑誌編集後記

桜の花も盛りを過ぎて葉桜となり、庭のつつじが美しく咲く季節となった。今月も症例報告ばかり6編であるが、日本消化器外科学会雑誌5月号を無事お届けすることができて安堵している。

昨年9月より編集委員を拝命し、毎月行われる編集委員会に出席してみて初めてわかったことであるが、編集委員長をはじめ編集委員の方々の熱意には圧倒され感服するものがある。提出された論文を何とか通してあげようと、査読者も含め編集委員が活発に議論・討議して修正箇所を箇条書きにして投稿者に送り返す。指摘された修正箇所を修正して再投稿された論文が再査読、再々査読に回ってくることは日常茶飯事であるが、編集委員の熱心な指導とは裏腹に、論文の書き方から始まりカバーレターに至るまでレベルの低い投稿に驚愕することが多い。症例報告を書いて投稿してくる会員の多くは若い研修医であり、投稿そのものが初めての経験である者も少なくないであろう。しかし彼らの指導者は、論文を投稿前に十分に推敲し指導しているのか疑問に思うことがたびたびある。指導医の先生方には手術の指導と同様に、論文執筆の指導も重要な責務であると認識していただきたいと思う。

昨今、原著論文は英文誌に投稿されることが多いため、どうしても本学会誌に投稿されてくる論文は症例報告が多くなることは致し方ない。症例報告は多くの若手外科医にとって論文の登竜門であり、本学会誌が担う役割は大きいと思われる。たかが症例報告と侮ることなく、十分に推敲を重ねたうえで投稿をお願いしたい。

日常診療の忙しい中で論文を執筆するのは大変ではあるが、その症例を経験しまだ記憶が新しいうちに書く癖をつけよう。できれば学会の抄録を書くと同時に、一緒に論文を書こう。

蛇足ではあるが先月をもって東京の学会事務局で毎月行われていた編集会議は最後となり、今月からはweb会議となる。Web会議では出席者全員の顔が一度に見られないなどの欠点もあるが、毎月編集会議だけのために遠方から上京していた編集委員の先生方の手間暇、経費を考えると格段の進歩である。海外出張中であっても会議には参加できるので、気を引き締めて責務を全うする所存である。

(長谷川 博俊)

2014年5月1日